



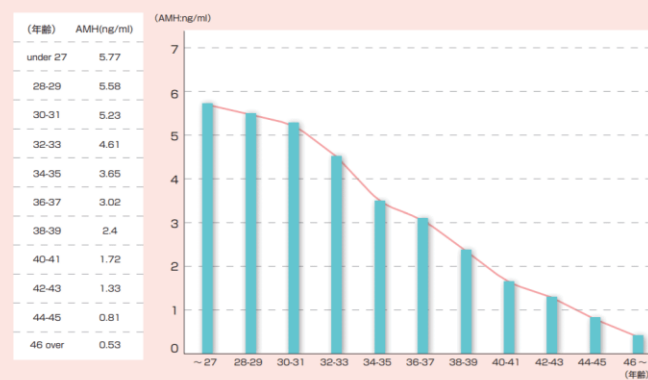
この検査は性成熟期と呼ばれる20～40代の女性のための、一般にブライダルセットとして行われる検査です。ご結婚という新たなライフステージを迎えるとき、お仕事やキャリアとの間で女性としてのライフプランを考えると、この年代の女性としての健康状態を把握することは重要な機会となります。今後の人生に影響するような感染症がみられないか、今後の妊娠出産に向けての心づもりとして、それぞれの検査の意義を参考に今回の結果をご自身のライフプランにお役立てください。

【AMH】 卵巣年齢を知る検査

AMH(アンチミュラー管ホルモン/Anti-Mullerian hormone)は、卵巣の予備能といわれています。わかりやすくいうと、『AMH 濃度から残存する卵胞の数を測定し、卵巣年齢を推定するもの』です。AMH 低い場合、自然排卵が起こりにくだけでなく、不妊治療の際に卵胞が発育しないため不妊治療を断念せざるを得ないということもあります。また、多嚢胞性卵胞症候群があると AMH 値は高くなりやすく、ピルなどのホルモン剤内服中は低い傾向になるなど、体質や内服薬で数値が影響を受けることもあります。

AMH は卵子の「数」を評価するもので、卵子の「質」を評価するものではありません。AMH が低値でも自然妊娠することはもちろんあります。妊娠率には卵子の「質」も非常に重要であり、これは年齢の影響を強く受けます。AMH の値を知って、妊活のタイミングや、なかなか妊娠につながらないと感じる際には専門医受診を検討することが大切です。

●年齢別 AMH の平均値 J15ART がまとめた2011年10月～2012年5月の間に実施した9806名(PCO、PFD除外)のデータより



【感染症】 パートナーのいる女性、これから妊娠を希望する女性にとって重要な感染症

(クラミジア抗体)

クラミジア IgA 抗体: 初感染と再感染時に上昇し、6 ヶ月で消失するため活動性抗体と呼ばれています。

クラミジア IgG 抗体: 感染後約 1 ヶ月後から上昇、数年間持続するため既往感染の指標となります。

女性がクラミジアに感染しても2割くらいの人しか症状が出ません。その症状もおりものが増える程度で、知らないうちに感染が進行することも珍しくありません。子宮の入り口(頸管)から卵管へ感染が進み、症状がひどい場合には骨盤腹膜炎、そして肝臓周囲となり腹痛で受診することもあります。炎症が落ち着いた後には、卵管卵巣、卵管内に癒着を起こし、不妊、子宮外妊娠のリスクにつながります。症状がほとんど出なかった場合にも、自覚のないうちに蜘蛛の巣のような癒着によって受精の障害となる欄干閉塞が起こり不妊症の原因となります。

「クラミジア・トラコマティス感染症」は決して珍しくない性感染症です。抗生剤の内服治療によりクラミジア感染は治癒しますが、癒着が消失したり改善しないこともあるため、現在の感染と、過去の感染を調べます。

パートナーでお互いに感染させてしまう「ピンポン感染」があるため、両者の治療を同時に行うことが重要です。IgA が上昇している場合には抗生剤による治療をお勧めしています。IgG が上昇している場合には、過去の感染で卵管閉塞や癒着のリスクがあります、不妊症と感じた際には生殖医療機関にご相談されることをお勧めいたします。

（梅毒）

性感染症の一種で、梅毒トレポネーマという細菌に感染することによって起こる病気です。

近年の梅毒感染者は 2010 年代から増加し、2020 年頃に減少したものの再び増加、2022 年には1万人を突破してしまい社会問題にもなっています。妊婦が感染すると、胎盤を通して胎児が感染する先天梅毒の原因になります。早産や死産、出産しても新生児に奇形が現れることがあり、妊娠を考える女性にとっては重要な感染症です。



（肝炎）

B型肝炎は、性感染だけでなく血液や体液を通じての感染もあります。もし症状のない感染（不顕性感染）を起こしていた場合、感染がわかっていても生活を共にすることに深刻な不安を持つことはなく、パートナーのワクチン接種など対策をとることができます。感染が分かった場合には、一度専門医を受診し精密検査を受けることが大切です。必要な場合には治療を行い、将来の妊娠出産の際には胎児への感染を予防するために周産期管理を行います。現在は、小児の定期予防接種にもなっているような身近な感染症です。



一方、C型肝炎は日常生活で簡単に感染することはありませんが重要な疾患です。無症状のまま、慢性的な肝炎が持続し、将来にわたり肝臓に深刻なダメージをもたらすために、B型肝炎とともにセツトで行われる検査です。

これらの疾患をもつ方々は、普通に日常生活や結婚生活を送り、妊娠出産もされています。新たなライフステージで、安心して健康的な日常生活を送るために対策をとることができる疾患です。

（HIV）

HIV に感染した女性が妊娠出産を希望することは可能です。ただし、将来の妊娠・出産を考慮した慎重な診療と治療方針の選択が必要です。例えば妊娠方法については、自然妊娠ではパートナーや、胎児へのリスクが生じます。男性、女性のどちらかがまたは双方が HIV 陽性なのかによって、より安全な妊娠の方法は異なります。分娩に関しても、母子感染を考慮し帝王切開を選択し、出産後も母乳ではなく人工栄養を行うなどの対策（出産後は赤ちゃんにも一定期間抗 HIV 薬が必要）などが必要です。このように HIV 陽性の方の周産期管理には産婦人科・小児科・内科などの専門職がチームを組んでのサポートが必要です。

（風疹）

風疹は妊娠を考える女性に重要な疾患です。妊娠中に罹患すると胎児へ重篤な影響を及ぼすため、抗体価が低い場合には予防接種が推奨されています。各市町村の風疹対策事業を利用するなどワクチン接種をご検討ください。



これらの検査は結果によって、ご不安になる方や、結果内容をどのようにライフプランに活かすことがよいかを悩む方もいらっしゃるかもしれません。結果について医師による説明も行っております。ご希望される場合にはご予約をお取りしておりますので健診センターまでご連絡ください。

文責） 麻生総合病院 婦人科 菅 裕佳子

（専門医機構 産婦人科専門医 日本女性医学会 女性ヘルスケア専門医）

医療法人社団 総生会 麻生総合病院



総生会健診センター